

# 国語科学習指導案

期 間：令和 3 年 1～2 月

場 所：東京学芸大学附属大泉小学校 3 年ゆり組 教室

対 象：3 年 1 名 5 年 2 名 6 年 2 名

授業者：太田風馬

## 1 単元名 「翻訳する」って、何をすること？

## 2 教材名

B. John (1994) 『Would You Rather?』 Red Fox

ジョン・バーニンガム著、まつかわまゆみ訳 (2010) 『ねえ、どれがいい?』 評論社

L. Arnold (1972) 『Frog and Toad Together』 Harper Collins

L. Arnold (1976) 『Frog and Toad All Year』 Harper Collins

L. Arnold (1979) 『Days with Frog and Toad』 Harper Collins

アーノルド・ローベル著、三木卓訳 (1972) 『ふたりはいっしょ』 文化出版局

アーノルド・ローベル著、三木卓訳 (1977) 『ふたりはいつも』 文化出版局

アーノルド・ローベル著、三木卓訳 (1980) 『ふたりはきょうも』 文化出版局

## 3 単元の目標

### 〈内容としての目標〉

- 英語の絵本について、原文と翻訳文との比較から、翻訳者の解釈と表現の選択の意図を汲み取ることができる。
- 「翻訳する」ということについて、自分なりの考えを持つことができる。

### 〈日本語としての目標〉

- 読み手や日本語表現としての自然さ等々の観点から、表現を選んで翻訳することができる。
- 自分の意見文の表現について、友達とのやりとりをもとに、適切に考えを伝えることができているかどうかを判断し、課題点を見つけることができる。
- 自分の考えを適切に伝えるために、教師の支援を受けながら、日本語の表現を選んで、自分の文章に取り入れることができる。

## 4 評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
原文の英語に対応する日本語の語彙を理解している。読み手や日本語の表現としての自然さ等々の観点から、表現を選んで翻訳することができる。	翻訳文を読み、翻訳者の解釈と表現の選択の意図を読み取ることができる。「翻訳する」ということに対する自分の考えを文章にすることができる。	読み手を意識しながら、進んで絵本を翻訳しようとしている。自分の意見がより適切に伝わるように、文章の表現を選んでいる。

## 5 単元について

### 〈児童の実態〉

本単元は、帰国児童に対する、日本語の個別指導の時間に行う単元である。本校には、海外での生活経験が長く、日本語での学習が難しい帰国児童を受け入れ、日本語指導等の適応指導を行なう国際学級が設置されている。学年毎に担任がいるが、週4時間配当の日本語の個別指導の時間には、学年に関係なく日本語レベルが同程度の児童が、いっしょに日本語のプリント学習をすることになっている。しかし、本単元で対象となる児童は、国際学級の卒業が間近となり、特段の日本語指導の必要がなくなってきたため、他の担当教員と相談の上、国語科をベースに特別に日本語の単元を組むこととなった。

対象となる児童は、近いうちに国際学級を卒業することが決定している3年生1名、5年生2名、6年生2名、計5名の児童である。5名とも英語圏からの編入した、英語と日本語のバイリンガル児童である。日本語のレベルは、すでに一般学級の授業に問題なくついていくことができるレベルであり、英語力についても、およそ学年相応の力を保持していると見られる。別の単元で、当該学年の国語教科書に掲載されているテキストや、海外ニュースを英語で読む活動を行った際にも、内容を十分に理解することができていた。

そのため、国際学級への編入当初は、英語を話せることが、彼らにとって自信となっていた。ただ、3年生と5年生の3名については、編入から1～2年が経とうとする中、自分の学年レベルの英語力はないのではないかと感じている様子があり、単元の直前にも、自分たちの英語力について、一部の児童からは、「そのうち、忘れてしまうと思う」といった発言があった。

また、日本語力に関しても、授業の中でまとまった長さのある意見や感想、振り返りなどを書く際には、意味は通じるものの、短文による表現が多く、文章が単調である点について、指導者側では課題を感じていた。しかし、授業の中で意思疎通をする分に問題はないため、これ以上の日本語の学習に本人たちもあまり意味を感じられていないという実態があった。

### 〈単元について〉

以上のような実態を受けて、自分自身の持っている複数の言葉に対して、子どもたちが再度肯定的に捉えられるようになること、また、日本語での表現力の向上を期待して、単元の設定を行なった。

第一次では、英語から日本語への翻訳について、問題意識を持たせることを目指した。まず、英語の絵本『Would You Rather?』を教師から読み聞かせ、気に入った1ページを日本語へと翻訳する活動を設定した。その後、自分たちの翻訳とプロによる翻訳『ねえ、どっちがいい?』を読み比べ、どのような違いがあるか、どちらの方がよいと思うか、意見交流を行った。これにより、「翻訳観」の違いによって、日本語での表現の選び方が異なることについて気がつくことを期待した。

第二次では、より長文の英語を日本語に翻訳することで、さらに多くの「翻訳観」に気がつくことを目指した。まず、授業者の方で用意した英語の本から、好きな本を選択させ、お話の一部について日本語へと翻訳する活動を設定した。その後、定期的に時間を設けて、お互いの翻訳を共有し、そのままでもいいと思う所、別の表現の方がいいと思う所を共有し、話し合いを行った。最後は、第一次と同様、プロによる翻訳と自分たちの翻訳とを読み比べ、どちらの方がよいと思うか、意見交流を行った。一連のプロセスを通して、「翻訳観」と表現の選択の違いについて、考えがより広がることを期待した。

第三次では、翻訳活動を通して、自分たちの気がついた「翻訳観」に、どのような考え方があったかをまとめ、翻訳をする上で特に何が大切だと思うのか、自分の考えを日本語で説明できることを目指した。

まず、自分たちやプロの翻訳家も含め、翻訳をする人間が表現を選ぶ上で、何を大切にしているのかについて分類し、話し合う時間を設定した。その後、自分は何が大切だと思うのか、分類した「翻訳観」を参考に自分の考えを意見文に書かせる。最後に、お互いの意見文を読み合い、それぞれの考えについて、より詳しく知りたいことを質問しあい、それらが確実に伝わるようにするために、クラス全体で意見文の添削をし合う活動を行う。これにより、自分なりの翻訳に対する考えを持つこと、また、その考えを文章で適切に人に伝えられるようになることを期待した。

## 6 単元計画（全7時間）

次	時	◆主な問い ○学習活動
第一次	①	<p>◆どのような日本語に翻訳するのがいいだろうか？</p> <p>○絵本『Would You Rather?』の読み聞かせを見て、面白かったところを出し合う。</p> <p>○好きなページを1ページ選んで日本語に翻訳し、お互いの翻訳のいいところと、直した方がいいと思うところを話し合う。</p> <p>◆プロの翻訳と自分たちの翻訳、どちらの翻訳の方が「いい翻訳」だろうか？</p> <p>○プロの翻訳（『ねえ、どっちがいい?』）と自分たちの翻訳を読み比べて、どちらの翻訳の方がいいと思うか意見を交換する。</p>
第二次	② ③ ④ ⑤	<p>◆どのような日本語に翻訳するのがいいだろうか？</p> <p>○英語の絵本から、好きなお話を一つ選んで、翻訳をする。</p> <p>○お互いの翻訳を読み合い、いいところと直した方がいいと思うところを話し合う。</p> <p>◆プロの翻訳と自分たちの翻訳、どちらの翻訳の方が「いい翻訳」だろうか？</p> <p>○プロの翻訳と自分たちの翻訳を読み比べて、どちらの翻訳の方がいいと思うか意見を交換する。</p>
第三次	⑥ ⑦	<p>◆それぞれの翻訳は、どうしてその表現を選んでいるのだろうか？</p> <p>○翻訳者が大事にしている観点から、それぞれの翻訳の仕方を分類する。</p> <p>◆「翻訳する」ときに大事なことは何だろうか？</p> <p>○「翻訳する」ときに大切なことは何だと思うか、自分の意見をワークシートに書く。</p> <p>○それぞれの意見文を読み合い、適切にそれぞれの考えが表現できているか、全体で添削する。</p>

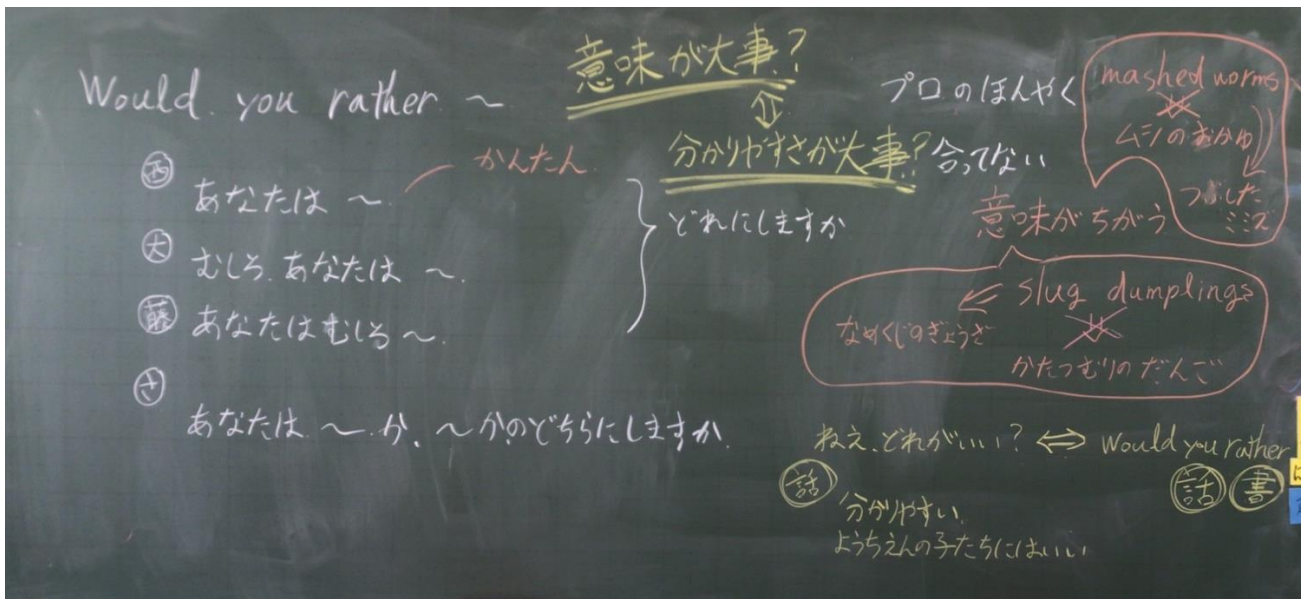
## 7 単元の実際

### 〈各時間の様子〉

結果的に、子どもたちの様子を見て、授業の進め方は、「基本的に個人で翻訳の作業を進める」→「困ったところがあったら、周りに聞く」→「解決できなければ、教師も入り黒板で共有しながら全員で解決する」という流れになった。なお、翻訳した文章については、コピーを取らずに返却してしまったため、手元に残っていない。そのため、以下では、各時間の板書と授業の様子について説明する。

### ○1時間目

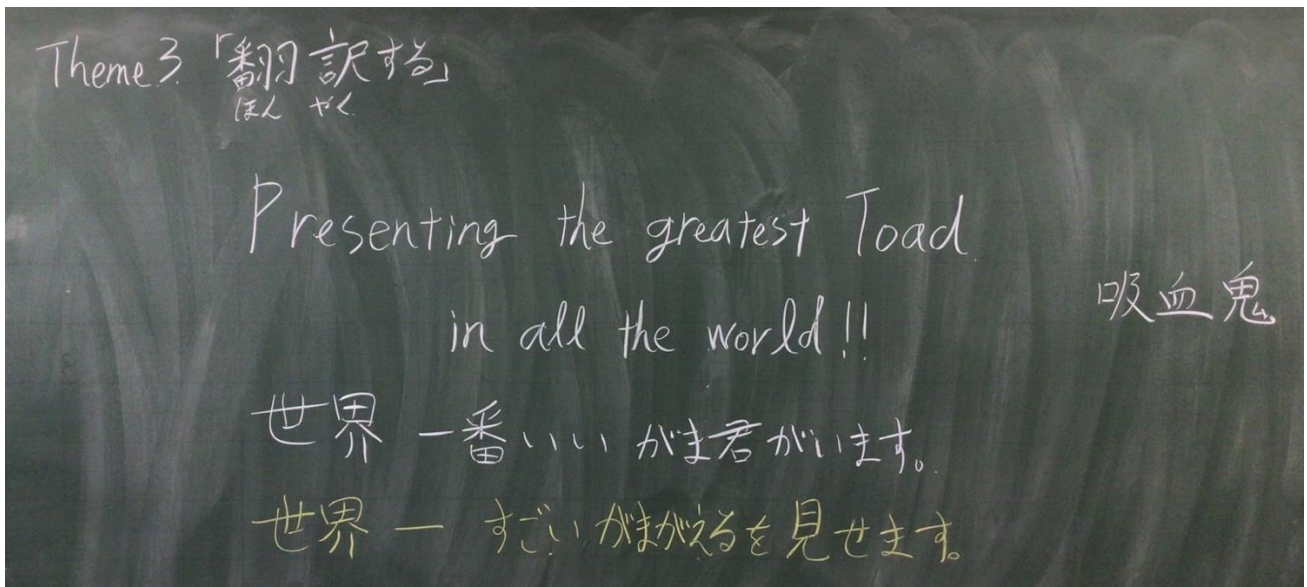
英語の絵本を読み聞かせたのち、好きな部分を翻訳、プロのものと比較して、どのような違いがあるかについて話し合った。当初、子どもたちは全員、プロの翻訳者の翻訳に対して否定的であった。



○2時間目

好きな絵本を読んで翻訳する時間。いくつか用意していたが、3、5年生はアーノルド・ローベルの「がまくんとかえるくん」シリーズを選択した。3年生の女子は、英語版も日本語版も読んだことがあり、5年生2名も、日本語版を読んだことはなかったが、このシリーズについて知っていた。6年生の2名については、こちらの用意した子ども向けの絵本があまり気に入らず、私物の英語の本を持ってきて翻訳することになった。一人は『ハリーポッター』の原作で、もう一人は、別の何かを翻訳していた。

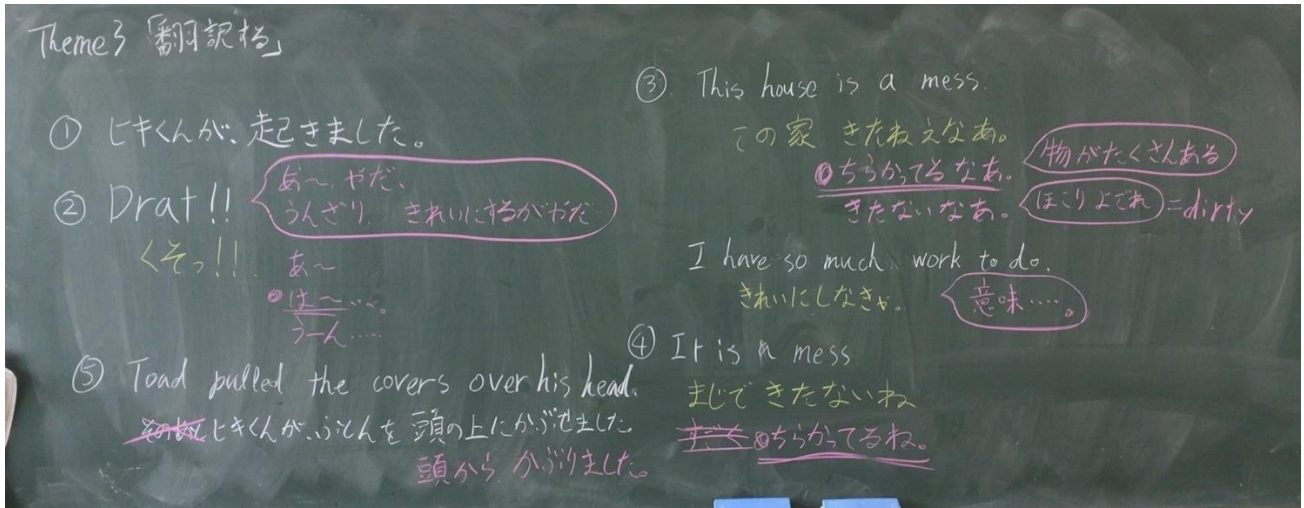
この日は、「Presenting the greatest Toad in all the world!!」という文について、この「Toad」を「がまくん」という固有名詞に訳すか、「がまがえる」という一般名詞で訳すか、という議論が起きた。初め、翻訳をしていた3年生の子は、これを「がまくん」と翻訳していたが、議論の結果「がまがえる」の方がいいのではないか、という結論に至った。このように、以降は、翻訳の過程で出てきた問題について、黒板で共有して、クラス内での最適解を探す、という作業を5時間目まで繰り返している。





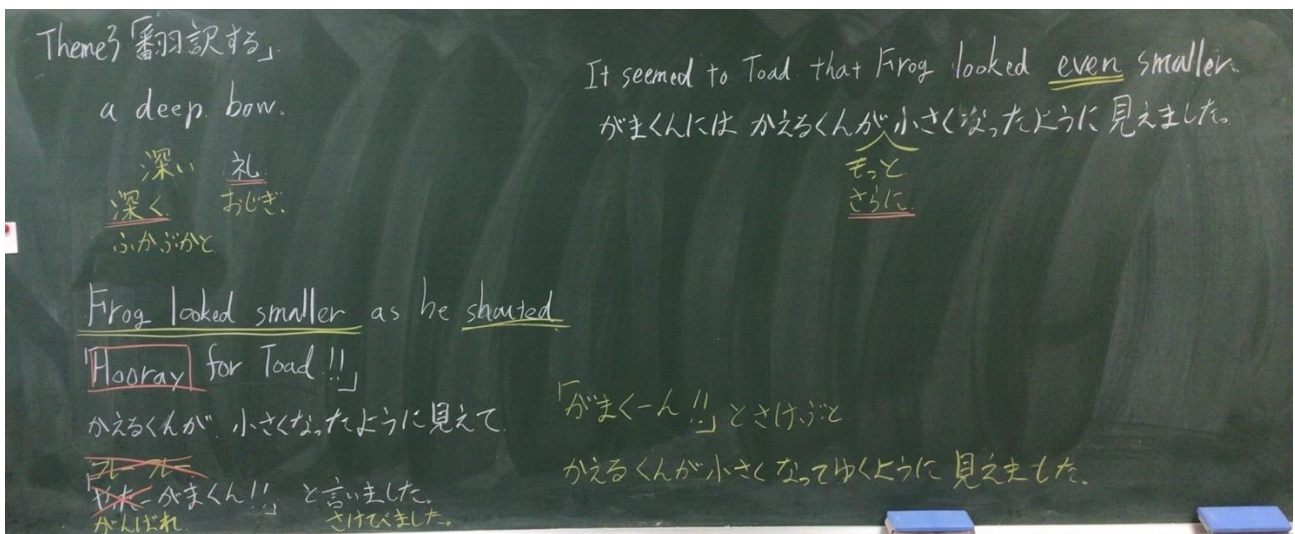
### ○3 時間目

この時間は、5年生が翻訳していたものについて話し合った。5年生の男子が、「がまくん」のセリフを「くそっ!」「きたねえなあ」のように、荒い言葉遣いに翻訳していたのに対して、「がまくんのキャラクターのイメージに合わないのではないか」という意見が出され、言葉づかいの持っているイメージについて考えた。板書の吹き出しは、その語彙に対して出た、語彙のイメージである。ここで、最後の作文の時にも出る事になる「物語のイメージに合っているか」という翻訳の観点が出された。



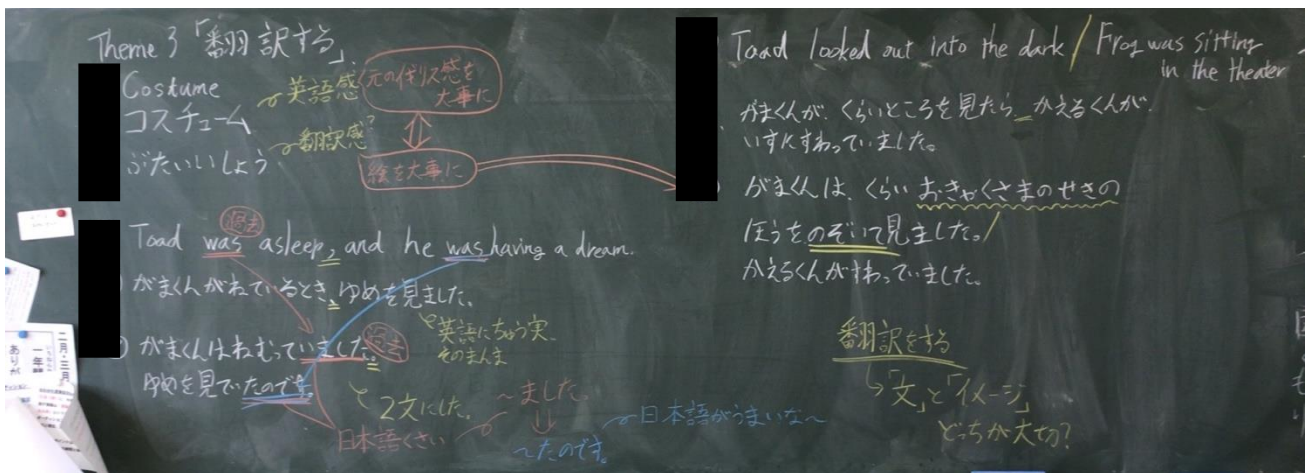
### ○4 時間目

この時間では、「日本語の言い方としての自然さ」ということが議論になった。がまくんがステージの上で「a deep bow」をしたという表現について、「深い礼」と訳して書いていたのだが、そんな言い方はしないのではないか、という意見が出た。教師の方から、代わりになる表現として、「ふかぶかと」や「おじぎ」といった語彙を提示し、どれがいいかを考えた。最終的には、「深く礼をしました」に落ち着いた。また、「Hooray for Toad!」の「Hooray」についても、「フレイフレー」「やっほー」「がんばれ」といった案が子どもたちから出されたが、「日本語の言い方としての自然さ」という観点から「がんばれ、がまくん!」がいいのではないか、という意見に落ち着いた。



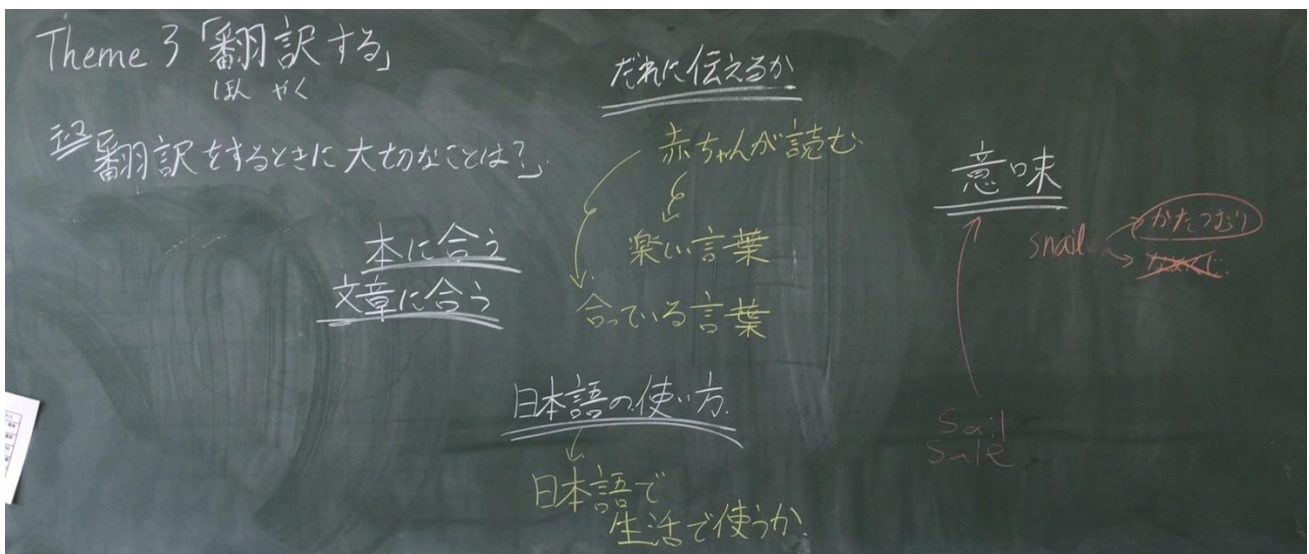
### ○5 時間目

この時間は、「誰に向けて書くか」ということがキーワードになった。板書の丸で囲われた「英」「西」「プ」というのは、それぞれ、「英語の原文」「児童の翻訳」「プロの翻訳」を表している。「Toad was asleep, and he was having a dream.」という表現について、原文に児童は原文に忠実に「がまくんがねているとき、ゆめを見ました」と1文で訳したのに対して、プロは「がまくんはねむっていました。ゆめを見ていたのです。」と2文にし、かつ文末の表現を少し変えている。これに対して、子どもたちからは「日本語臭い文章だ」というやや否定的な意見が最初出たが、最終的にプロの文章は「日本人にとっては、読みやすい文章だと思う」という意見に落ち着いた。ちなみに、ここの部分の翻訳をしていた児童は、最終作文の「翻訳をするときに大切なことは？」に対して、「だれにつたえるかだと思う」と答えている。



### ○6 時間目

「翻訳をするときに大切なことは？」に対する作文を書く時間。これまでの学習を踏まえ、翻訳するときにはどのような観点から表現を選ぶことが大切であるかを全体で確認したのち、100字程度書くことができる便箋に意見を書かせた。子どもたちからは、「誰に伝えるか」「原文の英語の意味に合っているか」「日本語の表現として自然か」「物語のイメージに合っているか」という4つの観点が出了。



### 〈子どもの作文〉

作文は、100文字程度の短い便箋を用紙にを使った。6年生は行事の関係で、最終作文を書くことができなかった。また、他3名についても、書くところまでは行ったが、全体で共有してお互いに添削する時間を取ることができなかった。そのため、以下の作文を授業が終わって、「翻訳する」上で大切なことの観点をお互いに確認したのち、書いたもので、本人意外の手は加わっていない。

内容としては、授業中に出た観点を自分の意見に取り入れている。Aについては、Cの文章を参考に、具体的にどういった具体例を入れたりする指導を、逆にCについては、AやBの文章を参考に意見を述べる際の観点的示し方などについて指導できればよかったと考えている。Bについては、「何て書くと合うか」「変な文章になってしまう」といったことの内実について、もう少し詳しく書けるように支援をしてきたかった。

#### A 3年生 女子

大切なことは「だれにつたえるか」だと思います。たとえば、赤ちゃんに読んであげる本の中にとってもむずかしい言葉が入っています。そうすると赤ちゃんにはおもしろいことやたのしいことがつたえずらくなります。だから「だれにつたえるか」がだいじだと思います。

#### B 5年生 男子

翻訳をする時にぼくが大切だと思うのは、その本に対して何て書くと合うかです。そうしないと変な文章になってしまうからです。

#### C 5年生 男子B

その英語をその意味で翻訳する。たとえば (snail) がなめくじになったらちがう意味なんです。でも、snail がかたつむりになったら同じ意味だとだめなんです。だからぼくはそうだと思います。